

IS <インフィニット・ストラトス>【月光夜桜】

月見乃夜桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神のミスにより幾度と無く転生する事になった修羅道 龍夜。そんな龍夜が次に行くのは「IS ヘインフィニット・ストラトス」の世界。

※1：この作品は「修羅道 龍夜」を主人公としたシリーズ作品です。

※2：最強オリ主、複数クロス等が嫌いな人はバックにGO

※3：一夏アンチは若干です。そこまで露骨にはしない予定（福音編に予定）

※4：行き当たりばったり執筆なので、途中でいろいろ変更が入りますがご了承下さい。

※5：福音編終了までは基本原作沿い予定

※6：批判を募集しています。

「心理描写が少なすぎて、なぜ○○したのかわからない」

「心理描写 or 戦闘描写などが長ったらしくて、くどいし読むのが辛い」

などの具体的な指摘は受け付けますが、注意している部分やただの誹謗中傷などは受け付けません。

また、ご都合主義や主人公のメアリー・スー化を防ぎたいので、そういう所が在りましたらご指摘お願いします。作者の力不足でご都合主義に近くなってしまう場合は、前書きにその旨を書きます。

※5／25：主人公の名字を『柳生』から『修羅道』に変更しました。

※11／26：批判募集のタグを追加しました。

※1／18：タグと注意事項を整理しました。

※3／9：注意事項を整理しました。

目次

プロローグ	1
一巻	
第一話 「原作スタート」	5
第二話 「箒の悩み」	10
第三話 「心の闇」	14

プロローグ

「うう……ん？」

目が覚めると、あたり一面真っ白な空間に居た。

そして、目の前に毎度お馴染みの女神テレスが現れた。

「やっほー！起きた？」

「ああ。そうか、今日だったな」

「はい。毎度お馴染みの更新日です」

昔この神が俺の生存書類を寝涎で濡らしたせいで、死に掛けたことがあった。だが、俺が死ななかつた事で、世界に歪みが出来てしまった。

世界に歪みが生じる主な原因は、本来生きている者が死んでいる事と、自身の生存書類が欠損もしくは消滅しているにも係わらず生きている事らしい。

その後、この神もいろいろ手を尽くした結果が、現在の生存書類の更新になった。

更新周期は人間世界で半年から一年となっていて、更新時間は人間世界で一晩、神の世界には時間の概念が人間界と異なるので、詳しくは判らないが約五百年から千年は掛かるらしい。

それで更新中は人間世界に居られず、神界にいても暇なので転生して時間を潰す事となった。

「それで、今回は何処の世界なんだ？」

尋ねられた神は手元に資料を呼び出し調べる。

「えくと、今回はくつと、ありました！略称はへIS、正式名はヘインフイニツト・ストラトスです」

俺はその場所を聞き、自身の『セイクリッド・ギア神器』の一つ【インフイニティ・ライブラリー永久不滅の無限大図書館】の中から検索し、原作を手元に呼び出し概要だけ読む。

「IS、ISつと、あった。何々、『ISとは宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかつ

たが、篠ノ之束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移っていった。』つか、何処の世界でも人間の考えることは一緒か」

俺が読み呆れていると、神が追加の情報を話した。

「ついでに、通常ISは女性にしか動かすことが出来ず、其の事から各国が女性優遇の政策を取り出した事から女尊男卑の世界になったそうです。ひどい人では面識すらない男性を捕まえて荷物持ちにしたり、自分の財布代わりにする人も居るらしいですよ」

話を聞いてたら胸糞悪くなって来て、「必要な事だけ言え」と視線で促した。

「えっと、それでこの物語の主人公織斑一夏が、そのISを動かした事で物語が始まるわけです」

神が冷や汗を垂らしながら口早に説明した。

「それから、今回の転生には他に転生者が数名居ますので、気を付けて下さい」

「わかった」

「なにか、必要でしたら今此処で言って下さいね。貴方のことですから、人には聞かれたくないでしょ？何時も通り願いは三つまでです」
こいつも俺のことを少しは解ってきた様だ。

「そうだな、先ず一つ目は何時も通り俺の力をすべて引き継ぎ。二つ目は供として、前に行ったコードギアスの世界で家族になった一人『アーニヤ・アールストレイム』にモルドレッド型のISを専用機として一緒に送ってくれ。三つ目は、ISのコアを三つくれ」

「確認しますね」

①全能力の引継ぎ

②お供としてアーニヤ・アールストレイムとモルドレッド

③ISのコアを三つ

これで間違いないですね？」

「ああ、間違いない」

「容姿と性別は、何時も通りでいいんですよね？」

「ああ、何時も通りでいい」

容姿は自分で作るのです、どうでもいい。性別だけは男に固定にして貰っている。

「貴方の専用機は如何しますか？」

「俺の専用機は・・・で、よろしく」

「はい！任せて！」

「それじゃ、アーニヤちゃんは君が呼んだら送るね。あと、二人のISは『白騎士事件』辺りには送るから」

「ああ、じゃあな」

一通りすることが終わったので、神と分かれて転生の間へと赴く途中後ろから声が聞こえた。

「行つてらっしゃい、龍夜さん」

俺はそれに手だけを振って答えた。



く転生の間く

俺が転生の間に着いた時、そこには二人の男と老人の姿をした神が居た。

そして、どうやら今説明を終え、転生特典を決めるらしい。

俺は転生の間に入らず扉の近くで中の様子を窺うことにした

「今から特典を授ける。特典は一人三つまでじゃ、一人ずつ聞いてやるから決まったものから前にでい」

老神が言い終つてすぐに二人居た男の内の一人が前に出た。

その男は高校生くらいの年で、身長は平均サイズで見た目は丸い眼鏡を掛け少し痩せ過ぎな様な細い体格で、喝上げされ易そうな外見をしていた。

「じゃあ俺が最初で！まず、身体能力と記憶力を高くしてくれ。つぎに性別を男で舐められない位に強そうな外見で、でも筋肉ダルマとかは止めてくれよ。で、最期に専用機にシヤア専用ザク型のISをくれ」

矢継ぎ早に言い終わると後ろに下がった。

「さて、次じゃサツサとせい。わしも忙しいのでな」

老神がせかす。もう一人の男、此方はさっきの男とは逆に横に広い体型をしていて、こちらはイジメられ易そうな外見をしていた。

「お願いします。最初に外見は銀髪オツドアイのイケメンにしてください。あと肥らない体質にもして下さい。つぎにニコポ・ナデポを付けて下さい。最後に専用機はAGE-1ガンダム型でノーマル・タイタス・スパローの三形態になれる様にして下さい。以上です」

そして、この男も後ろに下がった。後ろに下がる際に「ハーレム」と言う呟きが聞こえたが俺には関係ないことだ。

「それじゃ転生させるぞい。ああ、そうそう、おぬしらのISは原作開始少し前に送るぞい」

老神が腕を振るうと二人の男は光に包まれて消えていった。

「ん？おお、修羅道殿か。では、次の転生は修羅道殿じゃな」

一通り終わった様なので中に入ると老神が気づいく。

「ああ、よろしく頼む」

そして、俺——修羅道しゅらどう 龍夜りゅうやも光に包まれて、転生の間を後にした。

「さて、今回はわしも何か特典を授けようかの。修羅道殿の願いは……ふむふむ、ならばこれで良いかの。これなら特典三つのままで収まるしの」

老神の呟きと共に転生の間に光が灯った。そして、光が消えた後には転生の間に老神の姿は無かった。

一巻

第一話 「原作スタート」

く一夏く

なぜ、俺はここに居るのだろうか？

(あ、ああ。こ、これは予想以上にキツイ。他にも男が居るけどそれでもきつい)

俺は一人教室で頭を抱えていた。

それというのもクラスを見渡しても、居るのは女、女、女ばかりで、男は俺の他にもう一人。

全ての原因はあの時、不用意にI Sを触って仕舞い、有ろうことか乗ってしまった事だ。軽率な行動をした俺が悪いんだけど、もし戻れるならばあの時の俺を殴りたい。

そんなことを考えていると

「——君！織斑一夏君！」

「は、はい！」

大人に見えない童顔、それでいて顔に見合わぬ巨乳を持つ山田先生に呼ばれる。俺はとっさに返事をするが、少し声が上がらず、周りからくすくすと笑われてしまった。

「ご、ごめんね、いきなり大きな声で呼んだりして。で、でもね、出席番号順に自己紹介をされていて、『あ』から始まって、今『お』なんだよね。それで織斑君の番だから自己紹介してくれるかな。だめかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても」

俺は腹を括り席から立ち、自己紹介を始める。

「え、えーと……織斑一夏です。よろしくお願いします」

一夏の自己紹介はそこまで言って止まる。しかし、クラスの皆の瞳はその続きを期待していた。

(ううっ……これ以上何を言ったものか……。このまま、黙っていれば『暗い奴』のレッテルを貼られてしまう。それなら！)

このまま、黙っていれば『暗い奴』のレッテルを貼られてしまうと

思い、覚悟を決める。

「……ふう、以上です！」

(それなら、まだ『つまらない奴』の方がマシだ)

自己紹介を終える。そうしたらクラスの全女子が椅子から落ちかけた。一度溜めた分の期待のせいだろうか。

もしかしたら、このとき一夏に『このまま、つまらない奴だと思われれば、この視線地獄から抜けられる』との思惑が無意識に有ったのかも知れない。

「あれ？ 駄目でした？」

ゴス！

「自己紹介も満足に出来んのか、お前は」

声と共に後ろから俺の頭部へ拳が振り下ろされ、鈍い音を出した。俺は下手人を確認しようと振り返る。

「げっ、千冬姉?！」

ゴスツ!!

「学校では織斑先生だ」

注意と共に先程より強めに殴った千冬姉は、山田先生と少し話した後生徒達へと向き直る。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たちを一年で使い物になるようにするのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。解ったな」

千冬姉が自己紹介をしたとたんに、クラス中から黄色い悲鳴、というか声援が響き渡る。

『『『キャーキャーキャー!!! 千冬様よ!! 本物の千冬様よ!!』』』

「ずっとファンでした！」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

「私なんて沖縄から！」

「あの千冬様にご指導いただけるとはなんて！嬉しいですよ！」

「私、お姉さまの為なら死ねます！」

教室に嬌声が響き渡り、それに千冬姉は頭を押さえる。

「……まったく、毎年毎年よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ集中させているのか？」

本気で鬱陶しいそうにしている千冬姉。

しかしこれで人氣が落ちるところかあがる一方というのだから信じられない。

「キャーキャー！ お姉さま！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも、時にはやさしくして！」

「でも、つけあがらないように躰けをして！」

自分達が何を言っているのか解っているのか？ つと言いたくなるような発言まで出て来る。

「静かに！」

教壇に立った千冬姉の一喝で、さっきの五月蠅さが嘘のように静かになる。

「諸君らには、これからISの基礎知識を半年で憶えて貰う。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。良いか？ 良いなら返事をしろ、良くなくても返事をしろ！」

「はい！」



「それでは、これで——」

プシュー

「ん？」

千冬がSHRを終わらせようとした時、教室のドアが開き三人の男が入ってきた。

女子は金髪ショートと桃色の髪をアップにした小柄な女子の二人。

残りの一人が男子だった。

先ず男の容姿は、黒の長髪で顔の左半分を覆う眼帯をつけ、その上からサングラスをかけている。左耳に菱形の宝石が付いたイヤリングを、右耳にはシンプルなイヤークラスを数個つけている。

身長は190センチ、体格は服の上から見た限りでは平均より少し細め。

服装は改造制服で、標準制服の上着の裾をアキレス腱近くまで伸ばしたロングコートタイプ、ズボンは全体的にゆったりとしたドカンタイプ。標準では殆どが白だが、此方はその白を黒に変えている。

制服の前は完全に開けられており、Yシャツは第2ボタンまで開けて裾を出し、中には黒のシャツを着ている。そして首には二枚のドックタグを掛けている。

女子二人は特に制服には手を加えていなかった。

「貴様等、入学初日に遅刻とは……。特に、龍夜！お前には何日も前から早く寮に来いと連絡したのに来ず。更には昨日散々遅れるなど連絡したのに、遅れるとはどういう事だ！」

千冬が遅刻してきた一人に捲くし立てながら詰め寄る。そんな千冬の剣幕に金髪ショートの子が怯え、龍夜と呼ばれた男の後ろに隠れる。

遅刻してきた三人の最後の一人、桃色の髪をアップにした小柄な女子が、千冬達を携帯で撮影する。

「落ち着けよ千冬。ステラが怯えてる」

その言葉で落ち着いたのか仕切りなおす。

「まあいい、遅刻した理由は後で聞く。遅れてきた罰として今自己紹介をしろ。それから学校では名前ではなく織斑先生と呼べ」

最初に桃色髪の子が挨拶をした

「アーニャ・アールストレイム……よろしく？」

「な、なんで疑問系なんですか？」

麻耶がツツコムが首を傾げた後は、何も言わないので千冬が次を促す。

「ステラ・ルーシエ。海が好き」

「そ、それだけですか？」

金髪の子——ステラも麻耶の質問に答えず、龍夜に寄り掛かっていた。

千冬は龍夜に挨拶を促そうとして固まった。

「・・・はあ。修羅道、次は・・・お前は何をしている？」
「え？」

「え？じゃない。おまえが手に持っている物は何だ？」

「オマール海老と自家製チリソースだけど？」

龍夜は寿司の様にオマール海老をチリソースに付けて食べていた。

「何故今食べ出した？」

「腹が減ったから」

その後、二言三言の問答の後、千冬は龍夜から海老とチリソースを奪おうとするが、龍夜は千冬が動く前に残りを平らげた。

「え、修羅道 龍夜だ。プロフィールは秘密。以上」

「まあいい。それより、そのサングラスは外しておけ」

元々期待していなかったのか、一夏のようににはせずに軽く流す。

「しゃーない」

千冬に言われ、サングラスを外す。サングラスの下には最高級の宝石よりも鮮やかな色をした紅色の瞳がある。しかしその瞳が収まっている眼は凶悪なほど、眼つきが悪かった。

「!!!ヒッッ!!!」

その眼を見た千冬と箒以外の女全員が、小さな悲鳴を上げて息を呑んだ。

その後、千冬が三人を一番後ろに座らせSHRを終わらせた。

第二話 「箒の悩み」

「龍夜？お前もI S動かしちゃったのか？」

休み時間になると一夏が話しかけて来た。

「まあな」

俺と一夏は、俺が小一の終わりに一夏のいる学校に転校してから知り合った。親しくなったのはもう少し後だが。

「それよりも、お前の名前。たしか佐藤大紀じゃなかったけ？」

「一夏。その名前で呼ぶな。他人に付けられた名前なんて使いたくもない」

『佐藤大紀』。この名前は世界の両親たにんに付けたれたものだ。

俺は義務教育中は、この名前を色々使い、中学卒業と共に親兄弟たにんから離れ、この名前も捨て、元の名前の修羅道龍夜を名乗っている。

「まだ、家族の事を他人何って言ってるのかよ。いい加減——」

「あいつ等は他人だ。一夏、お前や世間まわりが如何考えようと関係無い。

『ただ血が繋がってるだけで家族とは思わない』これが俺の考えで、変える気も、変えられる気も無い。それに何度か言ったよな？『この事に関するお前等の考えを俺に押し付けるな』っと」

一夏が呆れたように言った言葉を遮り、俺は若干殺気の籠もった声で返した。

「あ、ああ、解ってるよ」

「気をつける。もう、次は無いぞ」

冷や汗を流している一夏に釘を刺す。

雰囲気为重くなった時、俺達の間影が差す。

「一夏、龍夜、今良いか？」

現れたのは篠ノ之箒、箒とは小一から小四の中頃に転校して行くまでの付き合いだった。

「ああ、いいぜ」

「別に構わんぞ。アーニヤとステラはここで待っていてくれ」

「わかった」

「うん、待ってる」

ステラ達からの返事を聞いてから箒、一夏に続いて教室を出る。



屋上に出ると箒は柵の前まで行き、止まった。

「それで？なんの用だよ」

「・・・うん」

一夏が早速呼んだ事について訊こうとするが、箒はなかなか話し出さない。

「6年ぶりに会ったんだ。何か話があるんだろ？」

「・・・あ・・・うう」

尚も質問するが、なかなか話し出さない箒に一夏は溜め息を吐き、自分から話題を振る。

「そういえば」

「な、何だ？」

「去年、剣道の全国大会優勝したってな。おめでと」

「なんでそんな事知ってるんだ！」

一夏が知っていた事に箒が驚き声上がる。

「なんでって、新聞で見だし」

「なんで新聞なんか見てるんだ」

箒が若干苦い顔をしながら言うが、一夏は気づかず話を続ける。

「ああ、あと、龍夜の名前の事。知ってたのか？」

「ああ、寮に入る数日前に家に来てな。その時に聞いた」

「たまたまだ。買い物で近くまで行ったから寄っただけだ」

言い終わると同時に予鈴がなる。

「箒、龍夜。俺達も戻ろうぜ」

そう言うで一夏は先に校舎内へと戻って行った。



「・・・なあ、龍夜」

箒と二人で教室へと戻っている最中に箒が声をかけて来た。それに「大会の事か？」と問い返すと箒は苦笑した後、苦い顔をして話始めた。

「私は、きつき一夏が大会の話をした時、二つの感情が生まれたんだ。一つは一夏にあんな戦い方をした私を見られてなくて良かったという安堵。そして——」

黙って聞いていると箒は一層険しい表情をして話し出す。

「そして、もう一つは褒められた事に対して嬉しいと言う気持ちだ！ 罪悪感よりも先に嬉しいと感じてしまった。本当なら罵られていても！いや、罵られこそすれ、褒められる事など無かったのに——」
「そこまで聞き、俺は口を挟む」

「それで？俺に叱って欲しいのか？罵って欲しいのか？」

「——違う！……ただ、ただ如何すれば良いのか。一夏に本当の事を言わなければいけないのか。それとも黙っていても良いのか」

「はあ。箒。俺が修めている武術は剣術だ。それも古流の方のな。だがお前の家の流派は剣術ではなく剣道だ」

「あ、ああ、それは解っている。だが、それが何の関係があるんだ？」
よく解っていない箒にもう少し詳しく説明してやる。

「剣道とは道を修める。この道とは人道の事を指す。つまり『精神の鍛錬』を目的とした活人剣だ。一方で剣術とは技術を修める。古流の技術とは『効率良く人を殺す術』を体得する事を目的としている殺人剣。つまり剣道家と剣術家とは舞台が違うんだ。まあ、最近の剣術は剣道と似たり寄ったりに為ちまっただけだな」

俺の言ってる事が解ったのか箒は暗い顔をする。そこで仕方なくフォローする事にする。

「本来なら『故に言う事は無い』と言って、終わりにする所なんだが。知らない中でも無いしな。俺から言わせて貰うと、自分で悪かった所が解ってるなら、別に無理して言う必要は無いとしか言えないな。あとは自分で整理を付けろ」

箒が悩んでいた事、それは憂さ晴らしの剣で対戦者、特に剣道に真つ直ぐな者を叩きのめし優勝してしまっただことだ。もし相手が1

年や2年ならまだ救いはある。しかし、もし3年だったら？中学最後の大会で、自分が必死に培ってきたものを憂さ晴らしの剣に叩け潰され、優勝を奪われたとしたら？箒も小さい頃から一生懸命剣道の腕を磨いてきた。その悲しみや悔しいみは理解出来るのだろう。故にそれを自分が仕出かしてしまった事が許せないのだろう。そして、その事が姉弟子あねでし弟弟子おとうとでしのような関係だった一夏に知られ、軽蔑され、侮蔑されることも恐れていたのだろう。

俺のアドバイスを聞いて箒も少しは整理出来たのだろう、幾分顔色も良くなった様だ。

そして、ちようど良く教室に着き、自動扉が開くと同時にアーニヤの叫びが響き、俺の闇を呼び起こす光景がそこにはあった。

第三話 「心の闇」

時間は少し遡り、龍夜と箒が着く少し前の教室。

私とステラは龍夜が教室を出た後、この後の話についてステラと話していたがそれも終わり、ステラはイヤフォンをして音楽を聞き、私は携帯の画像整理を始めて暫くした頃、銀の短髪に虹彩異色症^{こうさいいしよくししょう}、所謂オッドアイの男子生徒が話しかけてきた。

「やあ。僕は佐々木一刀って言っただ」

「だからなに？」

ステラは音楽を聴いていっているので、仕方なく私が答える。

「いやあ、HRの自己紹介が途中で終わっちゃったでしょ？だから自己紹介して置こうと思っただ」

「そう、ならもういい？」

この終始笑っているこの男が、どこか好きになれないので速く会話を打ち切りにかかる。

「そう言わないでさ」

「何をして——っ！」

佐々木は、いきなり頭を撫でて来る。初め何がしたいのか解らなかったが、次第に違和感に気づき、佐々木の手を弾く。

「いや、いや！・・・変えられる、私が殺される!!」

アーニヤが感じた違和感、それはかつて『神聖ブリタニア帝国第9 8代皇帝シャルル・ジ・ブリタニア』によって掛けられた『ギアス』に似た感覚。

自分の中で何かが書き換えられ、今の自分が消される感覚。ギアス程の即効性が無かった為に気づけたのだ。

アーニヤの叫びを聞きステラが身構え、教室の生徒がざわつく。

そして、教室の自動扉が開き龍夜と箒が現れた。



私と山田君は予鈴が鳴り次の授業の準備を終え、クラスに向かっている最中のことだ。

「織斑先生。織斑先生は修羅道君と知り合いなんですか？」

「なんです？藪から棒に」

山田君が急に龍夜との事を聞いて来たので問い返した。

「いえ、最初に修羅道君の事、名前で呼んでたじゃないですか。それに何度も連絡したとか

。だから、その、こ、恋人とか」

HRの事を言っている様だが、なんだか若干顔を赤くしてモジモジしながら聞いてくる。

「どうやら、恋人関係なのではと疑っている様だ。

「な、何を言っているんだ！こ、恋人などでは」

若干動揺してしまったのを見て、山田君は顔を赤くして迫ってくる。

「お、織斑先生！ダ、ダメですよ！教師と生徒でそういうのは！」

「だから違うと言っているだろうが！それに・・・」

◇◇◇

『な、何だこれは!?!』

——血の池に死屍累々と倒れている小学生や中学生、高校生に果ては大学生に見える者や特攻服を着ている者までおり、ほとんどの者の脚が在らぬ方を向いたり、千切れていたりしている。倒れている者は五十人近いだろう。

そして中には同じクラスで普段から自分の事を「喧嘩が強い」^{タイムン}「一対一なら大学の武道部主将クラスにも負けない」と豪語している不良まで倒れている。

『お、お前がやったのか?』

——その中にはただ独り背を向けて立っている者がおり、そいつに尋ねる。

『・・・ああ。これを見れば解るだろ?』

——そういうと、男は振り向かず紅く塗れ、未だ紅い雫を零す

拳を掲げる。

『なぜだ！——』

『なぜ？そんなのはどうでもいい。お前がこいつ等を殺す邪魔をするってんなら』

——私の言葉を遮り、男は言う。

『お前から殺すぞ？』

——男は振り返る。そしてその顔は、その瞳は——

◆◆◆

千冬の脳裏にあの事件がよぎるが、麻耶の声で意識を現実へと戻る。

「織斑先生？それになんですか？もしかしてやっぱり、イタツ！」

「私は弄られるのも、邪推されるのも嫌いだ」

いい加減五月蠅くなって来たので、山田君の頭に手刀を落として黙らせる。

そんな事をしていた時、前からウチのクラスの女子が息を切らしながら走ってきた。その女子に向かって山田君が注意するが、女子は停まらずこちらに来る。私は嫌な予感がしたので山田君を止め、目の前の女子に尋ねる。

「確かお前は鷹月だったな予鈴が鳴ったのに教室へ行かず、こんな所でなにをしている」

「お、織、織斑、先生」

鷹月は息も絶え絶えで、何を言っているのか判らないので息を整えさせる。少ししてマシになったのか顔を上げ口を開く。

「織斑先生。大変なの！早く教室に来て下さい！佐々木君が修羅道君に殺されちゃう！」

その瞬間、私は嫌な予感が当たったと思うと同時に、あの事件の光景がまた脳裏をよぎり、教室へと走り出す。後ろから鷹月と山田君の声と追っってくる足音が聞こえたが、構わず全力で走る。

◆◆◆

教室に着き、自動扉が開くのももどかしく思いながら待ち、開いた瞬間体を滑り込ませる様にして教室へ入った。

教室に入ると大半の生徒が怯え隅に寄っており、龍夜は佐々木に馬乗りになって殴り続け、一夏と篠ノ之は龍夜を止めようとしているが振り払われる。

そこで私はすぐに龍夜を止めに動く。

「龍夜、落ち着け！何があった?!」

「邪魔するな！こいつは徹底的に痛めつけてから殺す！」

止めようと後ろから羽交い絞めにするが、振りほどかれる。しかし、その時に見えてしまった。あの事件の時と同じ、私と龍夜が始めて出会った時と同じ眼。紅かった瞳は金色のスリット状になり、白目の部分は充血などと言えない程、生き血よりも尚^{なほ}紅く、死に血よりも尚^{なほ}黒く、元々その色だったのではないかと思うほど真っ赤に染まっていた。

「一夏！篠ノ之！佐々木は何をやらかした!?!」

千冬はもう一度、龍夜に羽交い絞めをしながら、一夏達に声を荒げて聞く。何故ならあの眼をした龍夜は殺ると言ったら殺るからだ。

「わ、私は龍夜と一緒に戻って来て、そしたら龍夜がいきなりその男に殴りかかって」

篠ノ之は知らない様だ。ならばと一夏を見る。

「いや、佐々木がオールストレイムの頭を撫でたかと思ったら、オールストレイムが悲鳴を上げて、そしたら箒と一緒に戻ってきた龍夜が殴り掛かったんだよ」

「俺の家族に！手を出す奴は!!殺す!!そいつを邪魔する奴も殺す!!!」

「ガハッ!?!」

「千冬姉!?!龍夜、テメエ!」

「や、やめろ！一夏!」

その叫びを聞いた瞬間、今まで争っていた最後列から最前列の壁まで吹き飛ばされる。それを見た一夏が飛び掛ろうとしたので静止する。

龍夜は佐々木の上から下り、私へ向き直る。

「千冬。また邪魔をするなら容赦しねえぞ」

「私は教師だ。喧嘩程度なら止めはしない。しかし殺しは見逃せない。だから止める」

一瞬、龍夜の口から黒い炎のような物が出た気がしたが、気のせいだろうと断じ、念の為に用意していた木刀を教卓の下から取り出し、正眼で構える。



龍夜の前で千冬が木刀を正眼で構えている。

「龍夜！どうしてしまったのだ?!」

「やめろ篠ノ之！今のそいつに近づくな！」

箒が困惑した顔で、龍夜に寄ってこようとするが千冬が制止の声を挙げる。しかし箒は制止の声を聞かず龍夜に縋る。

「なんだ箒？お前も邪魔するのか？そうなら——」

龍夜は箒の首を掴み、片手で頭上高く持ち上げる。

「——殺すぞ」

龍夜の身長は190cm、箒の身長は160cm、その差30cmだ。チンピラがやる様な、胸倉を引き寄せせる行為でも爪先が着くか着かないかギリギリなのに、龍夜が行ったのは首を鷲掴み、持ち上げる事。そうなれば龍夜との身長差^{30cm}＋龍夜の前腕部分^{約20、30cm}となり、箒は地面から約50〜60cm持ち上げられ、首を吊っているのと同じ状態になっている。

箒は苦しげにしながらも龍夜を説得しようとする。

「りゅ、龍夜。私は——」



「龍夜。これ以上はダメ」

更に力を入れようとした時、ステラが止めてくる。

「これ以上興奮したら決壊する」

ステラに言われてみれば確かに気と魔力が少量漏れており、自身に掛けた【拘束制御術式】の一部が決壊しそうになっていた。

箒の首から手を離し、拘束制御術式の解けかけた部分の術式を直して、息を吸い落ち着く。落ち着いていくと眼も元の状態に戻る。

「ふっー！」

「ぐふお!？」

最後に倒れて気絶している佐々木の脇腹に蹴りを入れて起こす。

ステラに礼を言い頭を撫でた後、頭を抱えてうずくまり、「助けて。龍夜助けて」と呟き続けるアーニヤを抱き締め、頭を撫でる。

「……龍夜。しばらくこうしてて良い?」

「ああ、俺がいつまでも護つてやる」

しばらく撫で続けるとアーニヤは安心したのか寝息を立てた。

眠ったアーニヤを抱き上げてステラと共に席に戻りアーニヤを抱えたまま座る。

そして、窓を開けて上着からタバコとジッポライターを出し、火を点けて吸う。

「はあく。お前達も速く席に着け。もうすぐ本鈴がなるぞ!」

クラス中は「え?今までの全部無視なの?!」と云う顔をしていたが、千冬の有無を言わせぬ威圧に負けて皆席に戻りだす。いや、実際に突っ込みを入れた織斑一夏と抗議をした佐々木一刀の二人は出席簿の餌食になったが。

「あれ?。どうしたの?おりむー達」

一時間目はトイレに行っていた一人だけが、のほほんとしていた。